

辻和之先生の

第90回

健康コーナー

わかりやすい東洋医学講座

第39回 脾と腎(前編)

東洋医学の基礎理論 ③9

これまでに、①心と肺、②心と脾、③心と肝、④心と腎、⑤肺と脾、⑥肺と肝、⑦肺と腎、⑧肝と脾、⑨肝と腎について取り上げてきました。今回は「臓と臓」の関係の最終コーナーである⑩「脾と腎」について説明します。まず腎の生理について復習してみよう。

【腎について】

腎気とは、腎の働きや機能を指しており、主に3つの働きがあります。

(1)【腎は、精を蔵する】といって腎には、精をしまい込み蓄える

作用があります。さらに(2)【水

を管理する】機能があり、体液を調節する作用があつて、体内の水液のうち有益な水分(清)を再吸収して留めたり、不必要な無益水分(濁)を排泄したりします。(3)【気を納める】機能も有しており、気の調節作用をし、主に肺の吸気を助ける作用を助けます。

腎に貯蔵される精とは、生命を成り立たせる根源的な生命力であり、身体の成長・発育・機能・活動及び生殖に欠かすことが出来ないものであり、精気とも称します。

(図1)精には、「先天の精」と「後天の精」がありますが、「先天

の精」とは、両親から生殖の精として受け継いだものであり、人体を形成する基本物質で、胎児の発育の本(源)となり、生殖や成長発育を促す作用を有します。

一方「後天の精」は、生まれてから後、摂取した飲食物から脾胃の運化(飲食物を消化・吸収し、生命エネルギー・気・血・津液に変換して全身に輸送する生理機能)によって作られた水穀の精気のことを云います。

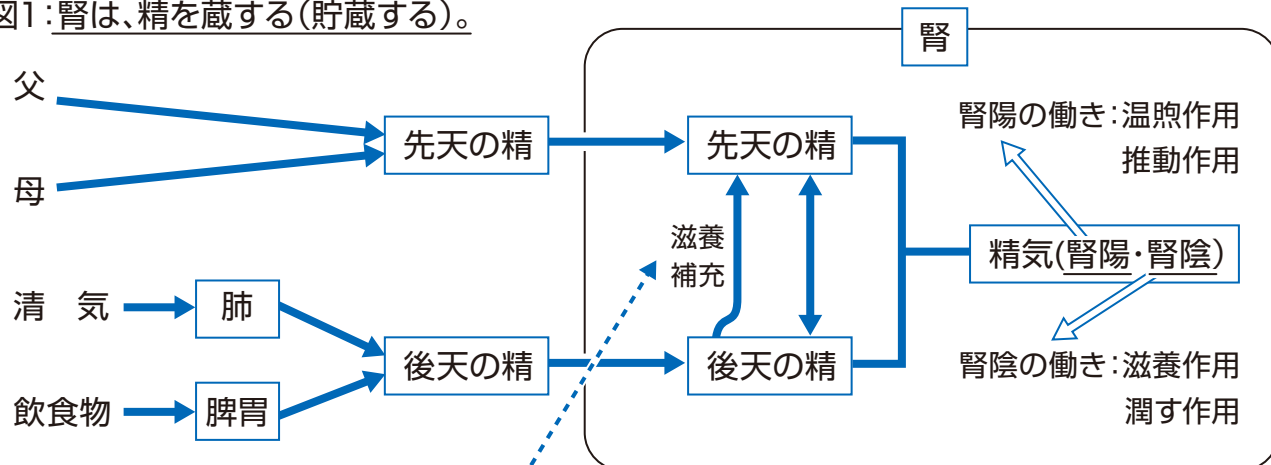
腎には、先天の精気ばかりではなく、後天の精気も蓄える作用があり、「先天の精」と「後天の精」は、お互いに補充し合つて、その生理機能を発揮しています。

腎中に蓄えられた精気の主な作用は、身体の成長と発育を促進したり、生殖能力を備蓄したりする作用であり、人の生・長・壮・老・死の自然経過は、清気の盛衰と密接に関係します。

腎中の精気には、腎陽と腎陰が有り、腎陽は、各臓腑や組織、器官を推動する(推し動かす)作用と温煦する作用があり、滋陰には、各臓腑や組織、器官を滋養して、潤す作用があります。腎の病的状態では、腎陽虚から来る病態(図2参照)と腎陰虚から来る病態(図3参照)があります。

(次号へ続きます)

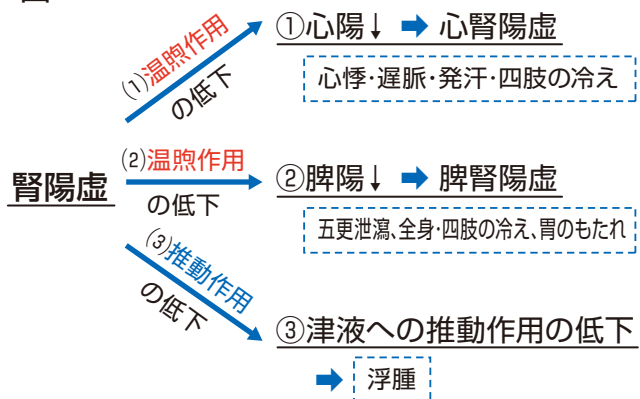
図1:腎は、精を蔵する(貯蔵する)。



両親から受け継いだ先天の精は、徐々に消耗されて行くので、後天の精で補充する必要がある。

腎の病的状態

図2



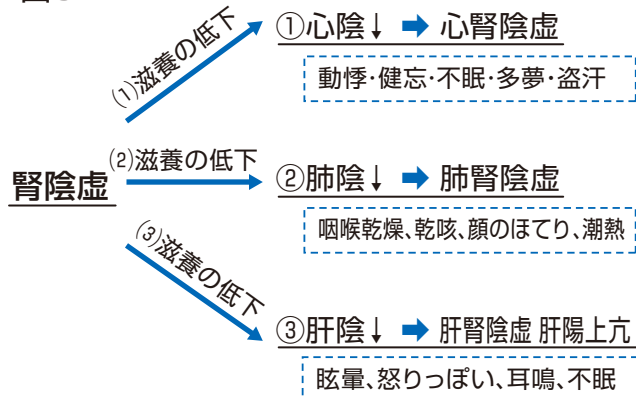
腎陽が不足すると

- (1)心への温煦作用の作用が低下し、①心陽不足となって、心悸(動悸)、脈が遅くなり、発汗、四肢の冷えなどの心腎陽虚の症状を呈する。
- (2)腎陽不足により脾の温煦作用が低下すれば、②脾陽虚となって、脾腎陽虚の状態になり、五更泄瀉(明け方の下痢)、全身・四肢の冷えなどを呈する。

腎陽不足から

- (3)腎陽不足による推动作用が低下することで③津液を推動出来なくなり、浮腫を来す。

図3



腎陰が不足すると

- (1)心への滋養が低下すると、①心陰が不足して心腎陰虚になり、相対的に心陽が勝り、心火が上炎して動悸・健忘・不眠・多夢・盗汗(寝汗)を生じる。
- (2)腎陰不足により肺への滋養が低下すると、②肺陰不足となって、肺腎陰虚の症状として咽喉乾燥、乾咳、顔のほてり、潮熱(潮の満ち引きのようにいつも一定時間になると発熱する熱、一般的には、午後が多い)などを呈する。
- (3)腎陰虚により肝への滋養が低下して肝陰虚を起こし、肝陽上亢し、肝腎陰虚の症状として、眩暈、怒りっぽい、耳鳴、不眠などを呈する。



医療法人社団和漢全人会花月クリニック

昭和26年 北海道江差町に生まれる
 昭和50年 千葉大学薬学部卒業
 昭和57年 旭川医科大学卒業
 平成 4年 医学博士取得
 平成10年 新十津川で
 医療法人和漢全人会花月クリニック開設
 日本東洋医学会 専門医
 日本糖尿病学会 専門医
 日本内科学会 認定医
 日本内視鏡学会 認定医



医療法人和漢全人会
 花月クリニック
 日本東洋医学会専門医
 医学博士
 和之